

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

^{ながいかいち}永井嘉一 (1920-1980) は、1937年に玄光社へ入り『写真サロン』の広告営業や編集助手を経て、同誌が戦時統合された『写真文化』(アルス・1941～)、『写真科学』(1943～)、『CAMERA』(1946～)の編集に携わります。1947年には光画荘へ移籍して『光画月刊』の編集を担当したのち、「なんとでも自分の手で、アマチュアが自由に楽しめる雑誌、アマチュアリズムに徹底した雑誌を作りたい」(『フォトアート』1970年4月号)として、同年秋に「研光社」を設立し、12月に一冊ワンテーマ形式の『写真撮影叢書』を創刊しました。同誌は第八集まで刊行後、1949年5月に『フォトアート』として月刊化しました。



『写真撮影叢書』第一集

創刊当初は女性ヌードの芸術性を主要テーマとしていましたが、1953年ごろには月例にシンクロフラッシュ撮影部門を設けたほか、著名写真家の実物印画付録、添付した標準ネガによる印画作成コンテストの開催、映画『十二人の写真家』の制作(1955年)、写真家のゴシップを集めた「地獄耳」の掲載など、次々と独自の企画を打ち立てました。

1956年には月例選者に土門拳を迎え、前年まで審査を担当した『CAMERA』で腕を競っていた月例作家が大量移籍しました。土門は1959年まで審査に携わったほか、自身の豊富な体験に基づいた経験論、随想風エッセイを連載し人気を集めました。

月例以外にも、臨時増刊『35ミリカメラ新書』(1955年)には、撮影の様子やカメラの使い方に関する座談会を収録しています。また、複数年にわたる表紙写真や、1963年には毎月書き下ろしによる題字と月例審査を依頼したほか、1973年からは毎号ワンテーマの姉妹誌『特集フォトアート』の内容に関連し、近況を伝える「土門拳レポート」を2年間連載しました。代表作『ヒロシマ』(1958年)、『続・筑豊のこどもたち』(1960年)を刊行したことから、土門との深い関係がうかがえます。

同社では『木村伊兵衛読本』(1956年)、田村茂『チベット』(1966年)、三木淳『サンバ・サンバ・ブラジル』(1967年)なども刊行していますが、1963年ごろには「フォトアート・ビジネス・センター」(PABC)部門を設けて、『日本写真協会会報』、『写真リアリズム』、『コムラーズ・アイ』など写真団体やメーカー出版物の編集に携わり、写真界における出版活動に大きな役割を果たしました。

「誰にもやれないこと、よそではやれないこと、俺でなければやれないことをやってゆくんだ」(『フォトアート』1950年3月号)という創刊直後の言葉に、1977年後半で出版活動を停止するまで写真専門出版社オーナー兼編集長として独自の路線を貫いた永井の姿勢が表れています。



『フォトアート』1963年6月号